
グランドセフトオート ワンセントアサシン

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランドセフトオート ワンセントアサシン

【Nコード】

N1422M

【作者名】

fordforest

【あらすじ】

リバティシティにはワンセントアサシンと呼ばれる殺し屋がいる。彼は常に依頼の代金に1セントコインのみしか要求しない。それ以上の金額の仕事は常に断っている。

彼の目的は復讐。

両親を殺した者への復讐。

この街で、彼は機会を待つ……。

O n e c e n t a s s a s s i n # 1 (前書き)

本作品には暴力表現や犯罪表現が含まれています。

「ああ、おまえさんか。まあ聞いてくれ。リバティーシティーって知っているな？ ああ、アメリカでもっともクソツタレな街さ。どいつもこいつも欲望が女のケツの穴なみにガバガバだ。まあ、そんななかで変わった殺し屋がいるのを知っているか？ そいつはワンセントアサシンと呼ばれている。ああ、報酬は経ったの1セントコインだ。なんでそんなはした金で殺し屋をしようとしたのか理解に苦しむ。まあ、裏社会のクズどもも下手に高い金を出すよりはワンセントアサシンに頼んだほうが早いつて思っているけど、奴にはいくつかのルールで動いている。以前奴に依頼したギャングが奴のルールを破っちまったせいで壊滅したつて話だ。ああ、例のマディソンファミリー壊滅事件だ。で、奴のルールは一回頼んだら次回の依頼は半年以上感覚を空けてから、金は絶対1セントコインだけ、依頼した以上命を殺ることに責任を取る、大体この3つが有名なルールだな。ほかにルールはあると思うがこの3つさえ分かっていると大丈夫だ。どこに行けば奴に会えるかって？ ああ、それなら単純明快だ。オレが奴との仲介役だ。ああ、オレと奴は兄弟さ。で、お前さん依頼は？ ないならいいがあるんだつたら1セントコインと標的に関する情報を渡してくれ。それさえあれば後は奴が全てやってくれる。オレは情報屋でもあるから最低限の情報さえありゃ、オレが奴に全てを伝えておく。なに、一度依頼してしまえば後はカートウーンでも見ながら待つてくれ。すぐにお前さんのところに終わつたことを伝えてやるさ」

昔、リバティーシティーのフランス国際空港の発着ロビーで両親が殺された。犯人は狂った殺人鬼だった。まだ当時10歳だった

オレは何も出来なかった。残されていたのは1セントコイン。

それから10年、奴の情報を得るために、奴への復讐心を持ち続けるため、俺は殺し屋家業を始めた。報酬は1セントコイン、奴が残したモノと同じコイン。

日本人だった過去を捨て、俺は今この街、リバティーシティで命を刈り取る死神となった。

過去の名前を捨てた俺の今の名前はリーパーだ。

「よお兄弟、新しい依頼を受けてきたぞ。依頼内容は至極単純、アルゴンギンのとあるアパートに住んでいるビッチを殺してくれってさ、これが詳細な情報だ」

兄弟と言っているこの男はビージ・ウェインズ、この街で信頼できる情報屋であり幼い頃俺を育ててくれた親代わりの男だ。

「ああ、1セントコインは貰ったんだろうな？」

「もちろんだ。ほれ」

ビージは俺に向けて1セントコインを投げた。

「しっかしお前もこの街で一等な奇人になっちまったな」

「それが俺のルールだ」

俺はそれだけ言って公園のベンチから腰を上げた。

「ああ、そうだ。例の情報だが手に入る算段が出来た。今夜11時にフランスス国際空港で情報提供者と会う予定だ、お前さんは当然来るだろう？」

「！」

俺は驚いた。ようやく、ようやく奴にたどり着ける。

「その前に今渡した依頼を」

「すぐにこなす」

「いいねえ、そうこなくっちゃ」

ビージは酷く醜い笑顔をニヤつけながら俺にオーストリア製のピストルを手渡す。ハンマーレスタイプのこの銃は俺にとっても最高の相棒だ。

「じゃあ、11時に」

「ああ」

それだけ言って俺は近くにおいてあったアドミラルに乗り込んだ。
もちろん誰の物かは分からないが。

One cent assassin #1 (後書き)

ついついやっちゃった。

はい、また追加です。

終わるのかこれ？

O n e c e n t a s s a s s i n # 2 (前 書 き)

この作品には暴力表現や犯罪表現が含まれています

アルゴンキンへは4つの橋が架かっている。

一番南からブローカーブリッジ、アルゴンキンブリッジ、イーストブローブリッジ、そしてノースウッドハイツブリッジ。俺はその中からアルゴンキンブリッジを経由して目的のアパートへ向かった。この街の警察ってのはすごく腐っている。

軽犯罪程度なら見失うとすぐに追跡を諦めるが重大な犯罪を犯せば、軽犯罪を犯した奴らをそっちのけで追いかける。この街が腐敗しているのは警察が大きな原因だと俺は思う。

そんなことよりもオレは今、向かいのアパートの窓越しに女を見ていた。例のターゲットだ。

女はベッドの上で男のホットドッグを出し入れしていた。

「見てられねえ」

オレはすぐにコートのしたからピストルを取り出し、女に向けて発砲した。

銃声が響くが、この街では日常茶飯事だ。

それがリバティ―シティ―。

それが自由の街。

オレは其の場を後にする。女の頭からは赤い鮮血が噴出しているがいまさらどうってことない。仕事が終わったらそれまでさ。

「なあ、自由ってなんだろうな」

オレは馴染みのバーでバーボンを煽っていた。

「さあな」

マスターであるレキは、日本から渡米してきた男で、屈強な見た目とは裏腹に意外と可愛いもの好きだ。そしてオレよりも20も年

上だからいつも話を聞いてもらってたりする。

「自由の定義は人それぞれだ、だからお前さんも早く見つけるとい
いだろうな」

「そう……だな」

自由……か。もう自由は手に入らないと思っていた。この道を歩
み始めてから何年も自由という言葉聞いたことが無かった。10
年、ずいぶんかかったがようやく奴の情報が手に入る。そしてオレ
は自由へ飛び出す。それを夢見よう。さあ、今日は夜まで仕事は無
い。一旦アパートへ行こう。今の時刻は午後3時を過ぎたところだ
った。

One cent assassin #2 (後書き)

前回より短いつ！

次回の予定は不明。

それにしてもGTAの二次創作って難しいなオイ。

O n e c e n t a s s a s s i n # 3 (前 書 き)

本作品には暴力表現や犯罪表現が含まれています。

そういえば先日の仕事でバラした女の死体、ちゃんと届いたかな？
依頼人の要望でチエーンソーで細かく刻んだが……だめだ、どう
にも気味が悪い。今でも吐きそうだ。

まあ、仕事だから仕方ないといえば仕方ない。この街はリハティーンシティーそういう
ものだからな。

午後十時。

約束より一時間早く目的の場所に着いた。月明かりが美しい夜だ。
駐車場にはいくつか所有者不明の車がおいてあるが、今は乗るつ
もりはない。

一時間後には情報が手に入るんだ。その思いが今オレの中で渦巻
いている。

その間にオレは1セントコインをまじまじと眺める。コインに彫
られたエイブラハム・リンカーンの横顔、あの時両親の身体から流
れた血で真っ赤に染まったリンカーン。

ああ、くそつ。この場所で、この時間で、この月明かりの下で、
奴は殺しやがった。

今度はオレが殺してやる。

そういえばこの白のパーカーもこれで着目だったな。お気に入
りだけど、仕事で血が……まあある種のポリシーだ。白、この白に
奴の血を染めてやる。奴の命を奪う証を白に……。

「もう来てたのか？」

「まあな」

しばらくしてからビージがやってきた。相変わらずの調子でだ。

「なあ、お前さんがこっちに潜っちまってから10年になるんだが……苦しくないのか？」

「……突然なんだよ」

ビージが珍しくオレのことを気に掛けていた。なにかあったのか？

「いや、俺がお前さんを拾ったのがちょうど10年前の今日になるんだなと思っちまってな」

ああ、そうだ。もう今日でちょうど10年だな。日付の概念が失われていたから忘れそうになったがちょうど今日で10年か。

「あの頃、ビージはLCPDの悪徳刑事だったのに……今じゃ退職してインフォーマー兼オレの受付になっちまったからな」

「なに……良心が俺の中でまだ残っていただけの話だ」

「本当にか？」

「ああ」

こんな軽口を言えるのも久しぶりだ。ビージにはいつも助けてもらっている。本当はこの世界にいるのが辛い。だがビージがジョークを飛ばしたりしているおかげか心が安定する。

「で、情報屋は？」

「約束の時刻はもうそろそろだが……お、来たみたいだな」

フランスス国際空港の駐車場に一台の黒塗りのリムジンがやってきた。その中から一人の男が降りた。外見はまだ30代半ばと言った感じの、少し太った感じの黒いスーツが似合った男。

「遅れてすまない。なにぶん、情報の整理に手間取ってな」

「お久しぶりです、^{マスター}師匠」

ビージは男に向かって師匠と呼んだ。なるほどな。

「で、彼が？」

「ええ、ワンセントアサシンですよ」

「はじめまして」

俺はとりあえず男に手を差し出す。

「こちらこそ」

俺の手を握る。人と握手をするなんて何年ぶりだろうか。

「で、情報は？」

俺は早速話を切り出す。

「これだ」

男は茶色の封筒を俺に手渡す。

「その中に情報は入っている。情報料は今回は特別に無料だ」

無料……だと？

「私も、その殺人鬼に娘の命を奪われてな……」

そういうことか。

「分かった。あんたの娘さんの無念、俺が晴らしてみせる」

「頼んだぞ」

それから男は再びリムジンに乗って、駐車場から離れた。

「なあबीジ、彼は……」

「ん？ ああ、すまないな。俺の師匠で、レリアス・モーゲン。裏社会でもっとも有名な情報屋の組織である”インフィニティーアイ”のトップだ」

インフィニティーアイ……無限の目……か。

「それなら情報はいくらでも手に入りそうだな」

「बीジは「そりゃそうだろ」と軽く相槌を打った。それはともかく、これで奴にたどり着ける。

ふと空を見上げる。銀色がかった月は、相変わらずの色をしていた。

「なあ、リーパー」

「बीジが話しかけてくる。

「なんだ？」

「おめえさん、復讐を終えたら……そのあとどうするつもりだ？」

その後……ああ、そういうことか。

「なに、ワンセントアサシンは消えるだけだ」

それだけ言っただけ俺も駐車場から消える。今は家に帰って情報を読

One cent assassin #3 (後書き)

久しぶりにワンセントアサシン。

GTAIVのマルチプレイで最もすきなのはフリーモード。

これ、最強。

D r u g m a n ' s d e a t h # 1 (前書き)

本作品には暴力表現や犯罪表現が含まれています。

あれから、隠れ家に帰って受け取った資料を確認した。ビージの言うとおり、そこには欲しかった情報がいくらかでも載っていた。俺の両親を殺した男の名前、オルトヴィーン・レイザース。そして顔写真も載っていた。見つけた。俺の相手が見つかった。だが、問題は場所だった。リバティシティの南西に浮かぶ孤島、ハピネス島にそいつの隠れ家はある。しかし現在、航行の規制が敷かれている。どうやら目立ちたがりやの犯罪者が暴れまわっているせいで船が出せない状況らしい。

「どのどいつだ。まあ、いい。しばらくは規制が解除されるまで機会をおとなしく待とう。だが、仕事は無くならない。一本の電話がかかってきた。」

『リーパー、仕事だ』

「はいはい。で、今回の標的は？」

『アウトルックパークのベンチの下に資料を置いといた。それを確認してくれ。もちろん1セントコインも入っている』

「了解」

電話を切って、俺は外へ出る。懐にピストルを忍ばせて。

アウトルックパークのベンチ、そう聞くといっぱいあるように思えるが俺とビージは予め決まったベンチを使うことにしている。いつものベンチの下にあるファイル。封を切って中身を取り出す。今回は男、それもすぐ腐った男。麻薬漬けにしてから女を売り飛ばす外道。そして同封された手紙には男に対する恨みが書かれている。曰く、自分の娘を誑かして売り飛ばした拳句、自殺へと追い込んだらしい。娘をしっかりと守っていればという自責の念も書かれてい

た。

1セントコインを手にし、ライターで情報を全て燃やしゴミ箱に突っ込む。

Drugman's death #1 (後書き)

お久しぶりです。ワンセントアサシンの新しい物語が出来上がりました。

今回は麻薬漬けにする外道を殺す話。情け容赦無しです。
あと今更ですが本作のリバティーシティーはI.Vの方です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1422m/>

グランドセフトオート ワンセントアサシン

2011年10月29日03時10分発行